●中国での生活

経営企画部経営企画グループ　尾崎 美喜雄

20年ぶりの海外勤務

私は2007年１月に経営企画部中国駐在員として中国広東省珠海市に赴任し、１年半余りにわたって中国で勤務した。海外勤務は1986年からの２年間の米国勤務に次いで２回目で、約20年ぶりのことであったが、巨大かつ重要な隣人である中国で非常に有意義な経験をさせていただいたと感謝している。

中国で定常的に働くためには外国人就業証と外国人居留許可の取得が必要であるが、そのためにはまず当局指定の機関で健康診断を受け、健康検査証明書を取得することが必要である。この健康診断には泌尿器検査もあって日本の通常の健康診断とは多少の違いが見られるが、感染症の血液検査の結果が最も重視されているとのことで、感染症防止を重視する中国政府の姿勢がうかがえる。

近代化した中国の街並み

珠海市の中心部では北京や上海等の大都市と同様に高いビルが次々と建設され、その街並みは近代的な様相を呈してきている。過去にテレビのニュースで放送されていたようなおびただしい数の自転車が街を走る光景は珠海市などの都市部ではほとんど見られなくなった。それに代わって乗用車が急速に増えてきており、珠海市でも夕方などを中心に渋滞が見られることがよくある。

しかし、地下鉄などの鉄道がない珠海市で市民の交通手段として大きな比重を占めているのはバス(公共汽車)である。市街地均一運賃は冷房がないバスが1.5元(約25円)、冷房付きバスが2.5元(約40円)と安価で、特に安い冷房なしのバスはいつも多くの乗客で混み合っている。バスには時刻表はないが、15分以上待たされることはそれほどなく、かなり便利で、私もよく利用した。この公共交通機関の充実が乗用車の利用に歯止めをかけ、エネルギー節約や環境保全にかなりの役割を果たしているのではないかと思う。

珠海市のバス

しかし、いろいろな路線のバスが次々と来るため、バス停は下の写真のように何台ものバスが同時に停車できるように非常に長く、しかもどの路線のバスがどこに止まるかが決められていないので、お目当てのバスが来ると、待っていた人はバスが止まったところに走り、入り口に群がって押し合いながら乗ることになる。したがって列を作って並ぶことに意味はなく、並んでバスを待っている人は誰もいない。中国人は列に並ばない人が多いと外国人から批判されることがあるが、こうしたことの積み重ねが列に並ばない習慣を形成してきたのかもしれない。

珠海市のバス停

しかし、北京オリンピックの際の政府の啓蒙活動の成果もあってか、街頭では「排隊」(パイドゥイ(列に並べ))という声をよく聞くし、整理券がない銀行の窓口でも皆きちんと並んでいる。今後はこうした批判はだんだん聞かれなくなっていくことであろう。

強気の中国人気質

中国では故鄧小平氏が改革開放政策を推し進めてからは社会主義市場経済体制がとられ、社会主義国家ではあるが、経済面での競争は激しく、それは他の伝統的な資本主義国家とあまり変わらない。経済が発展途上にあることもあってか、一攫千金を夢見て起業しようとする人や、より高い待遇を求めて転職する人は日本よりもかなり多いようである。街頭での顧客争奪戦も激しい。

中国人はもともと狩猟民族であり、農耕民族の日本人よりも自己中心的で弱肉強食の傾向が強いという話を聞いたことがある。前記の「列に並ばない」話にも共通する面があると思うが、確かに街頭では強気な人が多い。車は「先にブレーキを踏んだら負け」という感じで衝突直前までなかなか譲り合わず、歩行者や自転車は多数の車が往来していても平気で

横断歩道のない道路を横切ろうとし、逆に歩行者が横断歩道を渡っていても今度は車が平気で突っ込んで来る。中国は米国と同様に車は右側通行で赤信号でも右折可というところが多いので、青信号で横断歩道を渡っていても車が突っ込んで来ることがあり、油断はできない。したがって交通事故の光景を日常的に見ることになる。中国の自動車１台あたりの交通事故による死亡者数は日本の10倍以上との統計を見たことがあるが、このような状況が原因であろう。

もちろん、すべての中国人が自己中心的というわけではなく、逆に日本人よりも他人に対する思いやりが強い面も見受けられる。中国では年長者を敬い、いたわる傾向が強いようで、公共交通機関で老人が立っているとほとんどの人が直ちに席を譲る。これは儒教の伝統的な影響が残っているのであろう。また、2008年５月の四川大地震の際には多くの人が率先して多額の義捐金を供出し、私の知っている中国人で月給の１割前後の義捐金を出している人がかなりいた。報道によると、献血やボランティア活動を行った人も多かったようだ。日常生活ではあまり他人のことを気にかけない人でも、祖国が困難な状況に直面すると愛国心が高まって団結が強まるようだ。長い歴史を持つ祖国への誇りが心の中に潜在的にあり、こうした事態に直面したときにそのスイッチが入るのであろう。

観光

珠海市は1981年に経済特区に指定されてから多くの外国投資を集めて急速に発展した街であり、伝統的な観光資源はあまりないが、マカオに隣接する海岸線は亜熱帯の雰囲気が漂う景観で美しく、海岸線に立つ下の写真の「珠海漁女」は珠海市の象徴的な存在となっていて、多くの観光客を集めている。

珠海漁女

珠海の市街地には小高い丘が多く、いずれも公園になっていて、ちょっとした登山ができ、山頂からは青い海や隣接するマカオ等の美しい風景を楽しむことができる。私も休日にはあちこちの公園へ行って山に登り、運動不足解消に心がけた。毎回、登山道では若者、子供連れの若夫婦、老夫婦など、非常に多くの人とすれ違う。多くの人が体を鍛えることに熱心なのだと感心した。また、水が湧き出るところでは多くの人が大きな容器を持って並んでおり、日本と違って水道水を飲むことができない中国の事情を改めて認識した。

住居の近くの石花山公園の登山口.

珠海市の南隣のマカオは陸続きで、徒歩でいつでもマカオへ行ける。広東省に籍がある中国人も比較的容易に通行証を取得してマカオに行けるため、特に休日は出入境で1時間以上並ぶことも珍しくない。2008年７月には中国人のマカオ訪問が２ヵ月に１回に制限されたが、マカオは依然として大盛況の賑わいであり、カジノでは大金を投じる中国人の姿が目立つ。故鄧小平氏の「先に豊かになれる人から豊かになれ」との理論は着実に実現しているようだ。

マカオの大三巴牌坊（聖ポール天主堂跡）

中国滞在中にはその他に香港や広東省の諸都市、上海、杭州等へ旅行に出かけたが、最も印象に残ったのは桂林近郊である。

桂林近郊の風景

珠海市から桂林へは飛行機の便もあるが、私は夜行バスを利用して約10時間かけ、まず、桂林近郊の陽朔へ行った。夜行バスの内部は下の写真のように横３列、上下２段のベッド状の座席になっており、ほぼ完全に横になれたので、意外に良く眠ることができた。

夜行バスの内部

日本では地名としては桂林のほうが有名であるが、実際にカルスト地形の独特の形状の山々や鍾乳洞を多く楽しめるのは桂林近郊の陽朔が中心である。船も桂林から外国人用の遊覧船に乗るより、陽朔で船に乗るほうが経済的で、美しい風景を間近に長く楽しむことができる。陽朔では、珠海市でほとんど見かけることがなかった白人の姿が目立ち、サイクリングを楽しんでいる人が多かった。私も自転車をレンタルしてサイクリングを楽しんだが、美しい風景を満喫しながら運動不足を解消できたので、まさに一石二鳥であった。皆さんも桂林近郊に旅行される機会があれば、船に乗るだけでなく、サイクリングを楽しむことをぜひお薦めしたい。

桂林近郊をサイクリング

言語

珠海市は広東省にあるため、赴任前には珠海市の言語は広東語が中心で、日本で中国語として教えられている、北京語を基礎とした中国語の標準語である普通話(プートンホア)が通じないことがあるのではないかと心配していたが、全くの杞憂であった。珠海市では広東省以外に湖南省や湖北省などから働きに来ている人が多く、広東省出身者同士の会話では広東語が使われるものの、一般にはむしろ普通話のほうが多く使われていて、普通話ができればビジネスや日常生活には全く支障はない。

なお、香港やマカオを除く中国本土では、空港やホテルのように外国人を主な対象とする場所以外では英語がほとんど通じず、中国企業にも英語ができる人はあまりいないので、中国人と直接ビジネスを行おうとすれば、中国語は必須である。私は赴任前に会社の中国語サークル等で中国語を学んだが、赴任当初は中国語教師や音声教材よりもはるかに速くて不明瞭な中国語をほとんど聞き取れず、非常に苦労した。しかし、経験を重ねるうちに、ビジネスの面談や電話等の際に不自由を感じることは徐々になくなっていった。外国語能力はその国で一生懸命に仕事をしていれば自然についてくるご褒美のようなものであり、特に若い人はあまり不安を持たずに一生懸命にがんばってほしいと思う。

今後の中国ビジネスの行方

中国では人民元高と人件費上昇が続いており、安い人件費をあてにして労働集約型製品を製造し、輸出しようとする従来のビジネスモデルは急速に成り立たなくなりつつある。中国政府も、外資なら何でも歓迎するという従来の姿勢から技術力重視の姿勢に転換しつつある。

逆に中国人の所得水準が上がっていけば、今後は巨大な人口を有する中国市場の魅力がどんどん増大していくことになるだろう。今後の中国ビジネスは、中国の企業にはなかなかまねのできない高い技術力が必要な製品やユニークな製品を巨大な中国市場でいかに展開していくかが主眼になるだろう。

中国でのコスト上昇は決して中国ビジネスの終焉を意味するものではなく、新しい展開を促すものであると考える。私も中国での貴重な経験を活かして東亞合成グループの中国展開、アジア展開に寄与していきたい。